

## シリア難民水衛生支援事業（レバノン）最終報告

国際医療救援部 国際救援課 李壽陽  
(派遣期間：2018年3月～2019年3月)  
(報告日：2019年3月23日)

レバノン国内では現在、日本赤十字社（以下、日赤）と現地赤十字社による3つの事業が実施されています。そのうちの1つが、レバノン赤十字社（以下、レバノン赤）とともに2015年から開始したシリア難民水衛生（WASH）支援事業です。

2011年以降、シリアでの紛争を逃れ、多くの難民が隣国レバノンへ流入しました。レバノンにおける2018年時点のシリア難民登録者数は約95万人と報告されていますが、2015年以降の合法滞在の取締強化の影響もあり、非登録難民を含めると、実際には約150万人のシリア難民を受け入れているとレバノン政府は推定しています。<sup>1</sup>

紛争の勃発から7年以上が経過した現在、自国への帰還は依然難しく、多くの難民はレバノン国内で厳しい生活環境下に置かれています。このような背景のもと、日赤は、テントでの生活を続けるシリア難民および周辺地域に暮らす地元住民を対象として、水衛生面の支援を提供しています。対象地域の水インフラ環境整備と衛生促進に取り組むことで、関連疾患のリスクを削減してコミュニティのレジリエンスを高めることが目的です。

2018年3月からレバノンへ事業管理要員として派遣された私は、本事業の第4期（2018年1～12月）に携わりました。2019年3月に1年の任期を終えて帰国しましたので、ご報告いたします。

なお、事業内容の詳細については、当院ホームページに掲載の事業中間報告（報告日：2018年10月12日）もあわせてご覧ください。

[https://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/pdf/006\\_120.pdf](https://www.osaka-med.jrc.or.jp/aboutus/international/pdf/006_120.pdf)

2018年の水衛生（WASH）支援事業では、主に以下の活動をおこないました。

- ✓ 水設備（家庭用の1,000L水タンク、トイレ）を102世帯へ提供
- ✓ 冬季の洪水等への備えとして、砂利の敷き詰め、歩道や水路の整備など、居住環境を改善
- ✓ 衛生教育の継続的な実施と、衛生キット1,463セットを含む衛生関連用品の配布
- ✓ 地元住民（ホストコミュニティ）への支援として、水質改善のための給水設備を整備

上記の活動を成果として挙げられる一方で、本事業に関わることでみえてきた課題もありました。特に

---

<sup>1</sup> UNHCR, Vulnerability Assessment of Syrian Refugees in Lebanon - VASyR 2018  
<https://data2.unhcr.org/en/documents/details/67380>

難しいのは、正確な世帯数の把握と対象世帯への確実な支援の提供です。テントで生活されるシリア難民の方々の中には、洪水といった悪天候による影響や生計手段となる農作物の収穫などのために移動される方が少なくありません。このため、支援対象地区の世帯数は頻繁に変動し、アセスメント時、事業実施時、報告時の世帯数が必ずしも一致するとは限りません。実際に、支援対象のご家庭に未配布の物資が現在も一部残されています。また、水タンクとトイレを各世帯に設置したものの、世帯数の増加を受けて2年後に再介入した地区もありました。報告書に記載された数字の解釈に戸惑うこともあります。

さらに、2019年1月にレバノンはとりわけひどい洪水を2度経験しました。前年夏期に設置した水タンクは台の上に設置したことで高さが確保され被害を免れましたが、洪水で流されてしまったトイレがありました。シリア難民の方々や、洪水時に難民の緊急救援にあたったレバノン赤現地ボランティアからお話を聞き、難民の方々の暮らす環境の厳しさと、支援の難しさを痛感しました。



シリア難民の居住地を訪問し、レバノン赤職員とボランティアから話を聞く様子



スタンド（台）の上に設置された1,000Lタンクと、その横に設置されたトイレ



2019年1月下旬に訪問したシリア難民の方は、「洪水で流されたトイレのトタン板を再利用して、釜をつくりお肉やパンを焼いているんだ」、「これは神様からの贈り物だ」と言いながら焼いているお肉を見せてくれました。

難民方々のたくましさにも、おもわずこちらも笑顔になりました。

日赤は、2019年にもシリア難民水衛生支援事業（第5期）を、レバノン赤十字社とともに継続します。

今後とも、日赤の国際活動にご支援を賜りますようお願い申し上げます。



洪水で濡れたカーペットを乾かしている

※ 当院の日々の活動は、国際医療救援部公式フェイスブックで日々アップしています。